
東方幻風録

霊天玖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方幻風録

【Nコード】

N3948Y

【作者名】

霊天玖

【あらすじ】

咲夜を失った紅魔館……

人間ではない風也達……

あれから長年が過ぎ風也の居る幻想郷にはあの時の霊夢達はこの世に居なかった……

そして決断する。新たな次元へ行く事を

そして別の次元の人間界で、幻想郷に運ばれる一つの魂……
どんな外史が語られるのか

この小説は第1部の「東方幻想録」をあらかじめ読まないといけないと思いますのでまずそちらから読む事を推奨します。

第1話 人間界へ（前書き）

あれから百数年……長い時を掛け月夜に自分の力と同じ事を教えていた。そして自分と同じ過ちを繰り返さない様に……

第1話 人間界へ

風也と月夜は紅魔館の中庭で修練をこなしていた……風也の全身が変化しているのは良くある事だが今回は月夜のメイド服が黒く変色していたのだ。各部には黒い鋼の装甲が……

「月夜、もう良いだろう。魔装を解け」

「はい……」

「やっと俺と同じ力を手に入れたな………けどお前の力なら大丈夫だ。この力が暴走するのはドス黒い殺意の塊だ……お前の力は澄んでいて穏やかな力だ、暴走は無いさ」

風也と月夜は向き合い話していた……

「この力をお嬢様を護る為に使えという訳ですか？」

「ああ、その力でレミリアを護ってやれ。俺はこの幻想郷を離れようと思う。」

「っ！？父上！？どういう事ですか！？」

「実質、お前の力の方が安全性が高く性能的には俺より上だ。だから安心して任せられるんだ」

「父上……」

「もうお喋りはお終いだ………またな……」

風也の回りには魔法陣が出現する……風也の体は徐々に粒子と化す……月夜の目には一筋の涙が流れていた……

「月夜、心を強く持て。護りたい人を思え、そうすればお前の力は数倍にも跳ね上がる。その可能性を信じろ……良いな……」

「はい……父上……」

そして風也は完全な粒子となり幻想郷から姿を消した……レミリアを月夜に任せ……

すると後ろからパチュリーが現れた。

「月夜、風也は行ったのね」

「はい、パチュリー様……」

「あの人は別の時空へ飛んだ……私達魔法使いでも数千年は研究しないと出来ない行為なのよ……」

「分かっています。父上が自分から死を選ぶ事は無いので……」

そしてパチュリーと月夜は紅魔館の中へ入って行った……

……別時空の人間界……

真夜中の廃ビルに風也が現れる……黒いコートに黒いブーツ、サングラスを付け都会を歩いていた……

外見的にはバイオ ザードのタイ ントとしか見えなかったがツツ
コむのも野暮であろう。

ゴツゴツ……

「都会か………若い頃には行った事は無かったな………」

裏路地を歩いていると若い不良がぶつかってきた……

「おいごるあ！いつてえだろ！殺すぞ！」

「………」

風也は沈黙を続けていた………それに不良はキレた……

「てめえ金置いてけや！さもないと刺すぞごらあ！」

「やれるものならな………」

「余裕かましやがって！死ねやあ！」

不良はナイフを風也の腹部に刺そうとしたが容易くナイフを止めら
れていた………

「挑む相手が悪かったな！」

風也はナイフを刃を握って不良ごとゴミ捨て場に投げ飛ばしゴミに
激突させた………

「ぐほっ……」

「全く、こういうのを社会のゴミって言うんだろっなあ……」

そして不良を放置し表通りを歩いていった……

「取り敢えずこの時空の幻想郷に行くのも良いが人間界を満喫するか……」

そして風也は実に数百年ぶりに人間界で過ごす事になったのだ……

…

第1話 人間界へ（後書き）

東方幻風録第1話開始でございます。新たな主人公も次から出る予定です。これからも東方幻想録をよろしくお願いします。

第2話 消える命の灯火

午前10時……………

ある十字路信号で年寄りが荷物を重たそうに運び歩いていた……………

そして途中で信号が赤になりトラックが突っ込んで来て轢かれると
思った時……………

ドグシヤアア……………

ガラんガラん……………

「お婆ちゃん、大丈夫かい？」

トラックのフロントに腕を突っ込み無理矢理トラックを止めていたのは風也だった…………… トラックはひしゃげ、余所見運転をしていた運転手は野次馬と共に驚愕だ。

「ああ……………ありがとうねえ」

風也はお婆ちゃんを向こうの歩道まで連れ一息をついた。

【トラックにぶつかってトラックが壊れるなんて……………】

【というか腕……………刺さってたよね？】

周りに居る一般人はそんな話をしていたが聴覚が人間より良いからか何もかも聞こえていたが無視してその場を離れた。

「はあ……………身体能力が高過ぎるのも人間界では苦勞するなあ……………」

風也は人間並の手加減をするのに苦勞していた……………」

「だが……………そろそろ誰かが幻想郷に送られる事になるな……………死ぬか呼ばれるか……………どっちかだ……………」

風也はこの都市全てに神経を集中し探索を始めた……………」

ある学校では……………授業で柔道を行っていた……………」

「来い！恭輔！」

「へいへい……………だけど、もうこれ飽きたんだよなあ……………はっ！」

「ぬあっ！？」

その勢いで先生らしき柔道着を来た人は恭輔という青年に背負い投げを受けた。

ドゴンッ！

綺麗に背負い投げは決まり周りの生徒は拍手をしていた……………」

「全く……………恭輔は良くやるよ……………」

「そろそろ飽きて来てるんだけどね……………」

この青年は『霧生恭輔』という名前で剣道、柔道、空手に関しては全国大会で全て優勝を勝ち取っている猛者であった……

「面倒だし帰っても良いですかね？」

「仕方ないな、今日は帰っていいぞ」

「どーも」

そして着替え室で柔道着から制服に着替え鞆を持ち帰路に着いていた……

「本当に退屈だなあ……もう少し刺激のある生活がしたいわ……」

恭輔がため息をついて居ると前方から声が聞こえた……

『ひったくりよー！』

その声が聞こえた時、前を向くと黒い帽子を被った中年の男が走って来ていた……その後ろには女性が膝をついていた……

「はあ……ひったくりね……」

「どけガキ！」

「うるさい……」

恭輔は通り過ぎようとした男の服を掴み足をかけバランスを崩させた……

ドゴッ！

「がっ！！」

円運動の要領で男を一回転させ背中から一気に強打させた……………男は泡を吹き気絶していた……………

「はぁ……………」

その後、その男は警察に連行され恭輔は表彰されたがどうでも良い思っていた。

そして、工事中ビルの近くで悲劇は起きた……………

偶然なのか目の前で作業中の小型鉄骨が落ちて来た……………その下には……………銀髪三つ編みの女性が気づかず歩いていた……………

【その姉さんー！逃げろー】

「鉄骨だと！？間に合えっ！」

先に恭輔が気づき考えるより先に体が動いた……………

「速く此处から逃げろ！あぶっ！」

「え？」

ゴシヤッ！

女性に声を掛け気づかせると目の前に鉄骨の1本が落ちて来る……

そして恭輔が女性を押しして鉄骨の及ばない所まで出すと……鉄骨は……
恭輔の体を簡単に貫いた……

「じぶっ……………」

口から血がこみ上げ大量に血を吐き倒れた……………その場は血の海と化した……………

その後救急車で運ばれ病院で緊急手術が開始された……………

助けられた女性は手術室前で座っていた……………そしてランプが消え、手術室から医師が出てきた……………そして女性は医師に近づくと

「……………」(フルフル)

医師の横振りの否定……………それでどういう事なのかすぐにわかった……………

「……………」

その女性は病室に行き手を握る……………冷たい手だった……………血の気のない死んだ手が……………

すると後ろでスキマが開き八雲紫が姿を表す……………

「永琳、迎えに来たわよ。用は済んだかしら？」

「紫……………私は……………医者なのに人を危険な目に合わせてしまったわ

.....」

「その子が永琳を助けたの？」

「ええ、だからこの子の魂と記憶を幻想郷の彼岸に送って欲しいの」

永琳のその言葉に紫は驚いた.....

「本気なの？」

「これじゃ報われないわ、だから生きて欲しいの」

「分かったわ、任しておきなさい」

.....某所.....

風也は気配に気づいた.....

「この感覚.....スキマ妖怪の気配だ.....遂に現れたか.....」

風也もその感覚を？み魔法陣を使い幻想郷に飛び消え去った.....

第3話 彼岸と幻想郷

そして紫によって魂と記憶は幻想郷の彼岸に送られ、恭輔は目を覚ました……………

「此処は……………？俺、鉄骨刺さって死んだんじゃ……………」

恭輔は自分の体を見ると心臓部分に穴がぽっかり空いていた……………鉄骨が刺さった部位である。

「マジで死んでるっばいな……………じゃあ此処は三途の川ってか？んな訳無いか……………」

そうして川を眺めていると後ろから声をかけられた。

「良く分かったねえ。此処は三途の川の岸さ」

恭輔が後ろを向くと胸が大きい桃色の髪色のした鎌を持つ女性が居た。小町である。

「うおっ！？まさか死神？俺にトドメでも刺しに来たのか……………」

「君はつくづく勘が良いねえ、だけど君は何処で死んだか覚えてるか？」

「俺は道路で鉄骨に刺さって死んだんだ」

すると小町は考え込んだ……………

「道路？……鉄骨？まさかアンタは人間界から来たのかい！？」

「は？どういう事？」

恭輔の頭は行き当たりばったりな事が多く混乱していた。

「だから此処は人間界で死んだ奴が来る筈の無い所なんだって」

「はあ……なるほどねえ……」

「という事は映姫様の所にも報告しなきゃ行けないから……もう仕方ない！舟に乗りな！」

「あ、分かった」

恭輔は小町の舟に乗り小町は舟を漕ぎ始め進み出した。

「そついや名前は何て言うんだい？」

「あ、名前は霧生恭輔だけど」

「恭輔か、私は小野塚小町って言うんだ。私にはタメ口で良さ」

「じゃあ……よろしく、こまっちゃん」

そう言われると小町はきよとんとしてから笑いだした。

「ぷっ、あははははは！そう呼ぶかい。まあよろしくな」

そして彼岸の裁判所となる建物に着いた……

「じゃあ恭輔は此処で待っていておくれ、映姫様と話して来るから」
そう言つて小町は建物の中へ入つて言つた……………そして10分経つと小町が戻つてきた……

「恭輔、映姫様がお呼びだから着いて来ておくれ」

「こまつちゃん、その映姫つて上司？」

「まあそうなるねえ。逆らつたら怖くてね。着いたよ」

廊下で話しをしながら歩いていると目的地に着いた。そこには幼女とはいかないが身長160cmはある少女が居た。

「小町、お疲れ様です。貴方が恭輔さんですね。貴方の経歴を人間界担当の閻魔から見せて貰いました。素晴らしい経歴で天国行きも問題無いですが事故死したらしいですね？」

「あ、そうだけど……」

映姫の問いに恭輔は的確に答えて行く。嘘を話さず真実を……

「調べた結果で幻想郷の者が関わっている事が分かりました。ですから貴方の命を生き返らせ、この幻想郷で人生を送るというのもどうですか？」

「退屈な生活に飽きてたからそれで行かせてもらつよ」

「では、手続きを済ましてから遣いの舟で幻想郷に向かつて下さい。」

その後の対応は任せられる者が居ますので」

そして生き返り手続きとやらを済ませ遣いの死神の舟で幻想郷に向かう所だった……………

「では恭輔さん、新たな人生を送って行って下さい。死んで此処に戻ってくる事はやめて下さいよ？」

「分かってます。映姫様もお元気で。こまっちゃんにもお元気でとお伝え下さい。」

「分かりました。本当はそういうのは駄目ですが今回は免除して伝えておきます。」

「ありがとうございます。では」

そして遣いの舟は漕ぎ出して幻想郷へと向かって行った……………幻想郷で待ち合わせをして居るのは誰なのだろうか……………それを胸に秘め期待していた……………

こうして幻想郷のある川に着いて舟を降りてから遣いの死神に一礼しその場で待っていた……………

「本当に此処で良いんだらうか……………結構待ってるけど……………」

すると森の方で声が聞こえた……………

「えーっと、閻魔さんから言われた場所って此処だっけ？青年が居るって聞いたけど……………って君かな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3948y/>

東方幻風録

2011年11月18日04時14分発行